未来へつなぐサケ放流

―サケのふ化・放流―

三陸沿岸の主力魚種の一つである秋サケの漁が最盛期を迎えています。近年、サケは記録的な不漁が続き、漁獲量を大きく減らしています。今号では、市内で行われているサケのふ化・放流事業を紹介します。

人々の暮らしと深く関わってきたサケ

周囲を海に囲まれている日本では、古来から漁業が盛んに営まれ、魚介類は貴重なタンパク源として利用されてきました。特にサケは加工などの用途が広く、東日本各地の貝塚からはサケの骨が見つかるなど、大昔から人々の暮らしと密接に関わってきたことが知られています。

現代においても、秋サケは三陸沿岸の主力魚種の一つとして長年に渡り地域の水産業をけん引してきました。日本で獲れるサケは、各地の河川から放流されたサケの割合が高いといわれており、北海道や東北、北陸を中心に人工のふ化・放流が行われています。

近年、サケ漁は不漁の年が続き、サケ漁を持続することができるよう、人工のふ化・放流事業（増殖事業）の重要性が増しています。

伝統的な漁法 熟練の技でサケを捕る

北上川でサケのふ化・放流に取り組んでいるのが北上川漁業協同組合です。市内でサケを捕獲する場所は、新旧北上川の分岐点にある鵠波洗堰と脇谷洗堰。遡上の季節には、堰から見える川面には堰が吐き出す流れに逆らい、上流を目指すサケがひしめきます。

遡上するサケを狙い、堰の上で待ち構えるのは採捕者と呼ばれる漁師たちです。叉手網という最長で10㍍にもなる自作の網を手に、魚影を頼りに狙いを定めてサケをすくい上げます。市内で行われているサケ漁は沿岸の漁と違い仕掛けを用いない漁法。川の流れや川底の地形、なによりサケの動きを熟知した熟練の技が必要になります。川に上ったサケを捕獲することを採捕といい、県知事の許可が必要で、採捕数には上限が設けられます。近年は上限を大きく下回る採捕数に留まり、海だけでなく川を遡上するサケも減少しています。

40年以上前に市内で始まったサケのふ化・放流事業。北上川の伝統的で素朴なサケ漁は、ベテランの採捕者によって支えられています。

※写真は鵠波洗堰

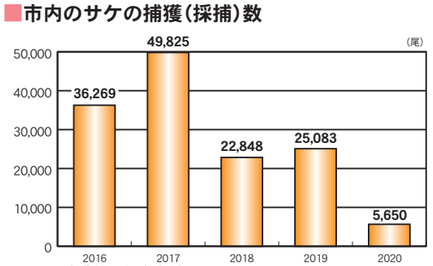
鵠波洗堰、脇谷洗堰

北上川河川歴史公園内に建設されている新旧北上川の分流施設で、北上川と旧北上川の水量を調節する重要な役割を担っています。

オリフィス構造と呼ばれる水路が堰の下部に設けられており、堰の上部には石張りが施されています。水路からは常時一定水量が流れていますが、洪水時などは堰の上部を水が越流する仕組みになっています。

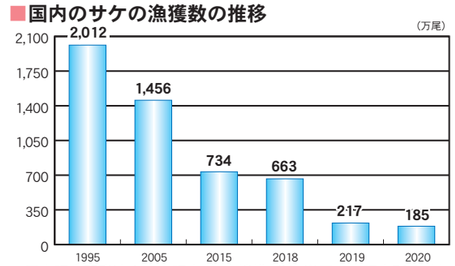
戦前の大規模分水事業として施工され、日本の分水堰技術の黎明期に建設された希少な建築物であることから、2004年に北上川分流施設群の一つとして土木学会選奨土木遺産に認定されています。

■市内のサケの捕獲（採捕）数



※北上川漁業協同組合資料

■国内のサケの漁獲数の推移



※国立研究開発法人水産研究・教育機構「北海道区水産研究所」資料

北上川漁業協同組合
代表理事組合長
佐々木 武雄さん（71）

資源が枯渇しないよう守るために捕る

人口の増加や産業の発展に伴い、大規模な河川改修が行われるなどによりサケが自然に繁殖できる環境が減ってきました。沿岸で行われるサケ漁は、産卵のため母川を目指して回帰するサケを捕らえます。近年は不漁の年が続いており、サケ漁は大きな打撃を受けています。組合では、サケ漁が持続できるよう人が手助けをしてふ化・放流をしています。人工のふ化には、親サケの捕獲が必要です。組合では県知事から特別採捕の許可を得てサケを捕獲しています。これからもサケを増やす手助けをし、大切な資源を守っていきます。